
私が選んだ、

yuris

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私が選んだ、

【Nコード】

N6961T

【作者名】

yuris

【あらすじ】

これを選んだら、また君に会えますか。
バッドエンドverあります

「あ、」

「……よお」

彼が軽く右手を挙げる。私も礼儀として同じく右手を軽く挙げた。家だって反対方向で、学校も違うんだから、もう絶対会わないと思ってたのに。こんな近場の公園で会うなんて偶然、だな。

「あんた、こんなとこで何やってんの」

「別に。お前こそ何やってんだよ」

「私は……散歩かな」

ベンチに座る彼を通り過ぎて、自動販売機に120円を入れる。何にしようか迷っているとある物に目が留まった。

「……はあ」

彼が好きだと言っていた缶コーヒーだ。私は苦いものが超が付いても足りないくらい大嫌いなんだけど、いつも彼におつかいを頼まれた時は言われなくても反射的に買ってしまっていたので自然と体が覚えてしまったんだろう。

“分かってるじゃん”

そう言ってくしゃりと頭を撫でてくれる彼が、好きだった。

こんな小さなことで一喜一憂している自分に悲しくなる。今更何を考えようが、もう一緒に過ごせる日は戻ってこないのに。そんなことは分かっているのに。

どうしてこんなにも、胸が痛むのだろう。

「好きなんだよ、ばーか」

「なんか“ばか”って言わなかった？」

「別に。っていうかどうしてそだけ反応すんの」

「あーっ。じゃあやつぱり言ったんじゃないか」

心の中で思わず苦笑。そういう変に地獄耳なところも、妙に頭が働くところ前に見た時から変わってない。

——どうしてだか、彼の変化の無さに安堵する自分がいたのを、私は気付いただろうか。

がこんとアルミ缶が落ちる音がする。ぴったり120円入れたのでお釣りは来ない。

取り出した私の手に握られたのは、黒色で『ブラックコーヒー』と書かれたものだった。

「ん、なにそれ」

「見て分かんない？ コーヒーですう」

「……へえ」

彼の隣に座って缶を開けると、やっぱり私の苦手な何とも言えない匂いが漂う。

ただ今は、なんとなく嫌じゃなかった。彼が隣にいたからかもしれない。

「よし、」

思い切って一口。口内に入った液体が私の舌を痺れさせた。やっぱり、私には合わない。

隣に座った彼がくくつと笑った気がした。

それが堪らなく悔しくて、私の神経を逆なでして、負けてやるもんかと言うように一気飲みする。大嫌いな苦味が私の口を支配したけど、彼に追いつけた証のようで。

やっぱり、堪らなく嬉しかった。

「おええ。不味い」

「ばつかみてえ。意地張るからだろ」

くくつ、とまた彼が私を笑う。今はそれすらも心地よかったんだけど。

「ふーんだ。いいもん」

アルミ缶をゴミ箱に投げ入れると、綺麗な放物線を描いてナイスボール。

もうすぐ2時。そういえば、母さんに今日の夕飯の買い物を頼まれ

ていたんだっけ。そろそろ行かなきゃ。

じゃあね、ばいばい、さようなら。どれも似合わない言葉だと思っ
たんだ。

だから、

「またね」

明日また、彼に会える気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6961t/>

私が選んだ、

2011年10月8日20時52分発行